
書 評・紹 介

阿藤 誠

『現代人口学：少子高齢社会の基礎知識』

日本評論社, 2000年11月, viii, 258pp

本書は、雑誌『からだの科学』における連載論文を纏めた人口問題エッセイ集である。その主題をあえて掲げるとすれば「人口転換と少子高齢化」であると筆者は述べる。本書は第1部世界の人口問題、第2部日本の人口問題に分けられ、第1部は、第1章人口論の復権、第2章地球人口と「持続可能な開発」、第3章先進諸国の人口転換、第4章途上国の出生力転換の鍵、第5章人口問題に対する人類の取り組み、そして第6章豊かさを求めて国境を越えるの章から成り、第2部は、第7章日本の人口転換、第8章少子化をもたらしたものの、第9章日本のたそがれか？第10章日本の家族のゆくえ、第11章「地方の時代」は来るか、第12章少子化対策という構成である。最後に補章として人口学の基礎と方法が付け加えられている。ちなみにこの補章は貴重である。

筆者は、人口問題に関し論理的かつ正確な文章を綴ることで恐らく他の追従を許さない書き手であり、本書も推敲の行き届いた瑕瑾のない文章が印象的である。現代日本の少子高齢化の要因、それに対する対策に関しては、練達の筆致で書かれており、この分野における筆者の精通振りを物語る。特に第8章と第12章は筆者が最も得意とする論題であって、期待に違わぬ読み応えのある議論の展開となっている。

少子化に対して少子化対策不要論、さらに少子化社会の到来は必然であり、少子化社会また楽しからずやという少子化肯定論もあるが、筆者は少子化の進行が日本の将来にとって望ましいとは考えない。また少子化対策のアドボカシー - が、リプロダクティブ・ライツの尊重、男女共同参画社会の実現のような普遍的理念に立脚するものであれば、国際社会で非難されるには当たらないと論ずるのは卓見である。結局のところ筆者は、ジェンダー革命、すなわち性別役割分業の社会から男女共同参画社会への転換が「日本のたそがれ」から脱却する鍵だと考える。

これは、これまで厚生省を初めとして、政府関連諮問機関が構想するオーソドックスな、穏健な考え方でもある。ただし、それをいかに具体的に実現するかについて、多くはまだ抽象的な領域に留まっていることは事実である。その中心的スローガンは、雇用の場における実質的男女差別の撤廃、共働き家庭における仕事と育児の両立を容易にするための企業雇用システムの変革、男性の家事・育児参加の推進といったもので、まことに結構であるが、それらをいかに具現化するかについては、必ずしも明確ではないと言える。しかし、日本は5年、10年経つと眼を見張る展開が起こる国なので、将来に期待しようというものである。

また第5章はその後半でカイロ人口会議のリプロダクティブ・ヘルス、アンメット・ニーズについて論じている。この内容は、筆者が政府代表団の一員として、カイロ会議、そしてその後のフォローアップの国連会議にしばしば参加し、つぶさに体験してきたものであり、その解説にあたって臨場感が漂う。

すでに筆者が「まえがき」でその割愛を説明しているところだが、本書が『現代人口学』というタイトルである以上、死亡の低下と寿命の伸長についての1章がやはり欲しかった。また途上国の都市化問題の深刻性、特に農村の貧困と人口圧迫による過度の人口都市集中の問題を扱っていないのも残念である。さらに、各章で複雑多岐な人口問題を要領よく解説しているが、内容について濃淡があり、人口転換、国連の人口活動、日本の少子化の様相・要因と対策以外のところでもう少し書き込んで欲しかったと希望するのは評者ばかりでなからう。

以上は望蜀の願いである。本書は、人口問題に対する入門者、少子高齢化の趨勢を理解するためのタイムリーな好著である。大学の人口論のテキスト、参考書として有用であろう。

(河野桐果 / 麗澤大学)